

ぞろぞろ・わいわい・人だらけ —狩野派も、それ以外も

板橋区立美術館(西高島平) 22.08.27~10.02



人びとの姿かたちを表現した絵画には、数多くのテーマがあるが、当美術館のコレクションには、“江戸時代を中心に個性豊かな人物を描いた作品”がある。

一例としてあげれば、礼拝の対象とされる肖像画、憧れや好奇の眼差しを向けられた美人や異国の人の姿に、画中で集い交情を深める人たちなどである。

今回、「板橋区制90年記念館蔵品展」として開催されるこれらの作品からは、描かれた対象同士のほか、作り手や当時の鑑賞者との関係など、作品をめぐる人と人との親密なつながりが見て取れるとされている。

歌川豊春 《邸内遊楽図》 絹本着色 中図

江戸後期の浮世絵師の初期の作品で、遊郭で拳遊びに時を忘れる旦那衆と太鼓持ち、芸妓(げいぎ)が描かれて、ギヤマンのグラスや朱塗の盃でくみ合わす酒が一堂に行き渡り、室内の賑やかさが伝わってくるような秀作とされる。

狩野典信 《唐子遊図屏風》六曲一双の一部 下図 18世紀後半

唐、すなわち中国から伝来した絵を「唐絵(からえ)」と呼ぶが、本作は、唐風の衣装を身につけた子どもたちの様々な遊びを生き生きと描いている。

本作品は、獅子の面をつけた二人が鼓を叩き、縦笛、横笛、笙を用いて雅楽を演奏する子どもの姿を楽しそうにとらえて、柔らかな印象をもたせている。

酒井抱一 《大文字屋市兵衛図》 一幅



江戸唯一の公許の遊郭として栄えた新吉原京町の高名な妓楼(ぎろう)大文字屋の当主「市兵衛」姿絵は、ひと目見て愉快そうで、猪首(いくび)で大きく膨れた顔に上すぼまりの頭、3.5等身の容姿にして余裕の笑みを浮かべている。格子柄の伊達な着物に「市」印の扇もしっかりと決まっている。

このおどけた表情がユニークな小柄な男は、かぼちやに似た顔立ちは、宝暦の頃ざれ歌になり囃されたが、彼は自図からこれを詠って人気を得たという。

抱一は、「二大目市兵衛」や「三大目市兵衛」と親しく、くだけた姿の初代の肖像もそのゆかりで描いたものだろう。